

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500797

研究課題名(和文) 青少年の喫煙・飲酒行動回避のための断るスキル評価に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A study on evaluation of cigarette and alcohol refusal skills for adolescent

研究代表者

岩田 英樹 (IWATA, HIDEKI)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：60322111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、青少年を対象とした喫煙、飲酒防止教育プログラムを開発することであった。そのために、中・高校生を対象とした喫煙や飲酒に関する調査研究を行った。調査内容としては、例えば、誰から喫煙や飲酒に誘われた経験やそれを「断るための戦略」、家族や友達の喫煙・飲酒に対する態度などであった。また、米国で、その有効性が実証された教材の分析を踏まえて、教育プログラムを試作した。実験授業の結果、小学生に比して中・高校生の方が学習のねらいをよく理解できていた。また、事前事後調査において、わずかながら良好な成績がみられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a smoking and drinking prevention program for adolescents. Accordingly, we conducted a survey on smoking and drinking for junior and senior high school students. The survey gathered information on subjects that included experiences of explicit drink offers from others and "refusal skill strategies" in such situations, and families' /friends' attitudes to smoking/drinking. In addition, we analyzed American "teaching materials which have proven to be effective" and produced a pilot program based on the assessment. Moreover, a comparison of the results from the pre- and post-survey showed that the students did slightly better in the post-survey.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・応用健康科学

キーワード：喫煙・薬物乱用防止教育

1. 研究開始当初の背景

欧米の青少年を対象とした喫煙・飲酒防止教育においては、科学的な知識・情報の提供のみを重視したプログラムから、青少年の心理社会的影響を考慮したプログラムが重視されるようになってきた。心理社会的影響とは、周囲の大人や年長の仲間の喫煙や飲酒に対して「格好良さや憧れ」などの誤ったイメージを持っていることや、仲間から喫煙や飲酒を勧められたりすること(ピア・プレッシャー)などの影響のことといえる。したがって、近年の喫煙・飲酒防止教育プログラムでは、青少年が喫煙や飲酒を開始・継続しないために、仲間からの圧力に対して自分の意志をはっきり伝えたりするための断るスキルの習得・向上に考慮したプログラムが開発されるようになった。

ところが、それらのプログラムが期待されていたほどには有効とは言えないという指摘や、必ずしも効果的に実施されていないという現状などが指摘されている。例えば、諸外国の青少年の断るスキルに関するレビューによると、それらのプログラムの有効性については、結論を正当化できる範囲は部分的なものであり、安易に一般化することに慎重であるべきだとする指摘もみられる。また、わが国の学校健康教育における実践動向においても、それらの授業報告ではピア・プレッシャーへの認知が曖昧であったり、習得された「断るスキル」の評価が十分に行われていない等の問題が残されていた。

2. 研究の目的

本研究では、わが国の喫煙・飲酒防止教育プログラムをより有効なものとして改善していく上で必要な基礎資料を得ることである。そのために、喫煙や飲酒行動の社会的要因に着目し、それらの実態把握とその関連要因の検討を踏まえて、教育プログラムの開発とその有効性の検討を行った。

3. 研究の方法

これまでの関連する先行研究の整理と米国でその有効性が検証された教材の分析を行った。また、我が国の中高校生の喫煙、飲酒行動における社会的影響についての調査研究を踏まえ、教育プログラムについて協力の得られた学校教員と協議を経て、実験授業による検討を行った。

4. 研究成果

(1) 関連する先行研究の整理、及び米国の教材の分析

断るスキルの習得に関連する先行研究の整理

近年、諸外国において他者からの誘いに対処するための能力を育成する有効なプログラムは十分に明らかにされていないようである。例えば、Herrmann and McWhirter のレビュー(1997)によると、青少年を対象と

した Refusal and Resistance Skills (これ以後は RRS と略す)については、「RRS が有効なのは喫煙防止についてのみであり、飲酒やその他の薬物については有効性の根拠は十分ではなく、他の薬物や行動に一般化することについて注意深くするべきである」と指摘している。また、RRS の育成を主としたアプローチによる米国の教育プログラム DARE (Drug Abuse Resistance Education) についても、その効果を検討したいくつかの評価研究(Ennett ST et al.(1994), Clayton RR et al.(1996), Griffin KW et al.(2001))において薬物使用行動に対する成績がわずかか、ほとんどインパクトがないと指摘している。

こうした状況に加えて、RRS の評価の難しさについても報告されている。例えば、小学6年生を対象に準実験デザインによる喫煙防止教育を行った Nishioka らの研究(2005)においても、喫煙の誘いを受けた場合の対処の自己効力感の変化では介入群の女子においては介入後に低下した、としている。これと類似した指摘は、Herrmann らのレビュー(1997)においても「RRS の教育プログラムの受講後では、そうした場面について敏感になり、より謙虚な評価を行うこともある」としている。また、MacKinnon DP (1991) らは、自己評価による RRS の結果の解釈が困難であることと、観察評価などを組み合わせる必要性を指摘している。確かに、他者からの誘いに抵抗したり、断ったりすることへの自己効力感を自己評価させることは、訓練を重ねることで返ってその難しさに敏感になる可能性がある。そのため、欧米では、他者による観察評価と自己評価を組み合わせた評価方法が用いられた研究(Rohrbach LA et al.(1987), Graham JW et al.(1989), Shope JT et al.(1993), Donaldson SI et al.(1994), Wynn SR et al.(1997)もいくつかみられるが、いずれも大掛かりな実験装置や予算が必要となる。また、RRS を他者が観察評価すること自体にも、妥当性の問題や評価規準設定の困難性、あるいは生徒と評価者の年齢差による RRS の受け止め方の違いなどの問題がある(岩田英樹(2009), Hideki Iwata(2011), Nichols TR et al.(2010))。

ここまでみてきたように断るスキルの習得に当たっては、いくつかの課題が示されているものの、包括的な予防カリキュラムに断るスキルに関する学習が埋め込まれた時に最も有効に機能することが指摘(Herrmann and McWhirter (1997))されている。また、特に肯定的な規範意識の育成に関わる内容の指導(一般的に Normative Education と呼ばれるもの)と組み合わせることが重要視されるようになってきている(Hansen WB (1992), Botvin GJ (2000))。この Normative Education では、例えば、自分の周りの友達の飲酒率や喫煙率を多く見積もったり、家族などが喫煙や飲酒を容認している、などといった「規範

の誤認」のある者に対して、それを是正することで喫煙や飲酒行動を抑制しようとするものであり、わが国では藤宮らによる論説論文(2011)で報告されている。米国などではこの Normative Education を取り入れた実践研究(Wynn SR et al. (2000), Hansen WB et al. (1991), Donaldson SI et al.(1995), Epstein JA et al. (2008))が散見されており、その有効性が認められている。このうち Wynn らの研究(2000)では、Normative Education と RRS をそれぞれ取り入れた飲酒防止教育を比較しており、RRS のみ群では飲酒行動の抑制にインパクトは認められなかったが、Normative Education 群では飲酒防止にインパクトがあったとしている。今後は、断るスキルの習得と共に、我が国の青少年に対する Normative Education の有効性についても検討していく必要がある。

断るスキルの習得及び社会的影響を重視した米国の教材分析

喫煙や飲酒防止を目的に含み、断るスキルの育成とともに Normative Education を組み合わせた教育プログラムで、米国でも広く実践・実証されている健康教育プログラムの中から「Keepin' it REAL」と「All Stars」を対象とした。以下に、両教材の a)対象学年、b)ターゲットとなる健康問題、c)主な教育内容、d)プログラムの特徴、e)Normative Education の特徴、についてそれぞれ述べる。

「Keepin' it REAL」: a)中学生、b)喫煙、飲酒、薬物乱用防止プログラムで、特に薬物使用への抵抗スキルの育成に焦点を当てたもの、c)10時間構成、d)抵抗するための戦略 REAL: Refuse(断る)、Explain(釈明する)、Avoid(回避する)、Leave(立ち去る)に各1時間(10時間中4時間)を当てている。e)「十代の若者の約半数がマリファナを吸っている」「ほとんどの中学1年生は違法な薬物を使用している」という意見に対する各自の考えを確認し、客観的データを照会することで「規範の誤認」の是正を目指している。

「All Stars」: a)小学4年から高校3年、b)喫煙、飲酒、薬物乱用防止や、性、暴力行為の防止などにおける青少年の危険行動の抑制をめざした総合的なプログラム、c)各学年で9~14時間程度(放課後などのオプションの学習活動も例示)、d)家族や学校のつながりを高めることを意図した教育内容も含まれている(保護者向けのパンフレット資料「保護者のための6つの予防戦略」など)、e)Scienceの時間で、自然科学ではなく社会科学の方法に関する学習を位置づけ、みんなの意見や考えを調べる方法(社会調査の基礎)への理解や、一人一人の考え方が集まって規範が形成されること等を確認する(4,5年)。クラスで作った肯定的な規範を繰り返し意識付ける(6年~中3)。ケーススタディを行う際、必ず最初に「クラスで登場人

物の行動に同意する人の割合」を予測させてから討論を行う(6年~中3)、など。

わが国で、規範意識に関する内容を取り扱う場合は、道徳や生徒指導等における指導がほとんどといえる。これらに関連する指導資料をみると、地域の伝統的教訓等の学習、マナーやルールの教示、ボランティア体験の奨励、などが目立つ。これらと比較すると、両教材での Normative Education では、(a)社会科学の方法を通して、規範が規範となる過程について丁寧に学びつつ、(b)自分も他者もそれに従って行動していることを確認し、(c)望ましくない/偏った主観的規範への客観的なデータによる検証、(e)クラス集団で望ましい規範を遵守し合うように繰り返し想起させているところ、などが特徴といえよう。

わが国での健康教育に Normative Education を適用するに当たっては、米国の教材をわが国の児童生徒用に加工修正し、教師にとっても指導しやすく、児童生徒にとっても学習しやすい内容となっているかどうか、評価が必要と言える。また、喫煙や飲酒など健康に関わる規範ではなく、健康行動等に直接関わらない「一般的な規範意識」についての学習は、道徳の時間や生徒指導等の指導とも連携して進めることも重要といえる。

(2) 青少年を対象とした喫煙、飲酒行動に関する調査

大学生への喫煙の開始・継続に関するインタビュー調査

半構造化面接法により、青少年の男性8名(平均年齢21.8歳±1.28歳)、女性10名(平均年齢22.2歳±2.53歳)にインタビューによる調査を行った。主な面接内容は、基礎的な質問(年齢、現在の喫煙状況)、開始要因に関する質問(きっかけ、タバコの入手方法、家族の喫煙状況)、継続要因に関する質問(喫煙時の状況、禁煙の試み、学校での喫煙防止教育の印象)等であった。調査期間は、それぞれ男性:平成22年7月~11月、女性:平成22年12月~平成23年10月であった。

喫煙のきっかけの様子を見ると、必ずしも威圧的に、強く誘われた訳ではなく、友人(あるいは、女性では特定の異性)と一緒にいる時に喫煙を勧められたり、あるいはむしろ自ら自発的に喫煙に至ったりしているようであった。また、女性では、特定の異性との関わりの中で自分が喫煙することで相手との関わりを深めようと試みる中で喫煙に至る者もみられた。

家族の喫煙状況では、多くの者が家族の誰かが喫煙していたが、それらの家族の喫煙に対して強い嫌悪感を抱きながらも喫煙に至る者があった。

この他、家族に喫煙者がいることで、子どもの喫煙開始に気付きにくく、子ども自身も「喫煙は(健康に)良くないことだ」という意識が乏しくなること、そして、子どもの喫

煙を止めさせようとする周囲からの働き掛けが乏しくなる、等の傾向が伺えた。

男性では、未成年期の喫煙であるため、人目を避けた場所か、一人での喫煙が約半数であったが、女性では喫煙所に同行し一緒に吸ってくれる友人の存在が喫煙の機会を生み出していた。

喫煙したい時について、女子では、人間関係や環境の変化などストレスを強く感じた時に喫煙したくなると答えた者がめだつた。

多くの者が禁煙の必要性を感じ、何度かそれを試しているものの、その方法は単に我慢するというものがほとんどで、医薬品の使用や専門家の指導などを行っている者はわずかであった。学校における喫煙防止教育では、一般的に禁煙の方法等に関わる内容については取り扱われないが、それに関連する情報にアクセスできるような配慮も必要と思われた。

以上、今回の対象者へのインタビュー調査からは、周囲からの強い誘いがきっかけになっているというよりはむしろ、軽い勧めにのって自発的に喫煙を開始する傾向が目立った。したがって、「断るスキル」にも増して絶対に吸わないという意識をどう作るのかが問題と言える。

中・高校生を対象とした喫煙、飲酒行動に関わる調査

対象は、学校長の了承が得られたA県の中学校5校の1～3年生2,866名、および高校5校の1～3年生2,600名である。そのうち解析対象は、中学生2,835名(有効回答率98.9%)、高校生2,498名(同96.1%)、合計5,333名とした。

調査は、2012年8月～12月に、無記名自記式の質問紙法により実施した。調査実施者は各学級の担任教員であった。調査の実施に当たっては、調査実施手順書に従って、その統一化を図った。

主な質問項目は、月飲酒/喫煙(この一か月に1日以上飲酒/喫煙をした者の割合)、この一か月に周りから飲酒/喫煙を誘われた経験の有無、家族や友達などの飲酒/喫煙行動、周りの人の飲酒/喫煙行動予測、などである。また、飲酒や喫煙に誘われた際の断る戦略についても尋ねた。なお、中学生に対しては飲酒の項目のみとし、高校生には飲酒および喫煙に関する質問項目を設定した。

中学生の飲酒に関する主な結果は、次のとおりである。月飲酒は、全体で5.4%(男5.5%、女5.3%)であった。ここ1か月間で飲酒を誘われた経験を1回以上持つ者の割合は、全体で8.0%(男8.5%、女7.6%)であった。周囲の人の飲酒行動については、父親の飲酒では73.0%、母親の飲酒は55.2%、兄・姉の飲酒は10.9%、その他の友達などの飲酒では、親友5.7%、飲酒する友達が一人以上いる者9.7%、特に仲の良い異性2.0%であった。同世代の飲酒の割合に対して「半分くら

い(50%くらい)」を含む、それ以上の者が飲酒しているの見積もった者の割合では、全体で9.9%(男8.7%、女11.2%)であった。これらの結果と、月飲酒との関連についてクロス表によるカイ2乗検定を行ったところ、例えば、この一か月に飲酒に誘われた経験がある者の月飲酒は46.7%であったが、誘われた経験のないものの月飲酒は5.8%と有意な差が認められるなど、全ての項目において有意差が認められた。

高校生の飲酒に関する主な結果は、次のとおりである。月飲酒は、全体で13.2%(男14.3%、女10.7%)であった。ここ1か月間で飲酒を誘われた経験を1回以上持つ者の割合は、全体で18.5%(男20.1%、女15.1%)であった。周囲の人の飲酒行動については、父親の飲酒では75.3%、母親の飲酒は56.3%、兄・姉の飲酒は26.7%、その他の友達などの飲酒では、親友20.4%、飲酒する友達が一人以上いる者32.5%、特に仲の良い異性8.0%であった。同世代の飲酒の割合に対して「半分くらい(50%くらい)」を含む、それ以上の者が飲酒しているの見積もった者の割合では、全体で27.6%(男27.4%、女28.0%)であった。これらの結果と、月飲酒との関連についてクロス表によるカイ2乗検定を行ったところ、例えば、この一か月に飲酒に誘われた経験がある者の月飲酒は58.1%であったが、誘われた経験のないものの月飲酒は12.4%と有意な差が認められるなど、全ての項目において有意差が認められた。

高校生の喫煙に関する主な結果は、次のとおりである。月喫煙は、全体で3.8%(男5.3%、女0.6%)であった。ここ1か月間で喫煙を誘われた経験を1回以上持つ者の割合は、全体で8.6%(男11.0%、女3.4%)であった。周囲の人の喫煙行動については、父親の喫煙では41.1%、母親の喫煙は14.9%、兄・姉の喫煙は8.8%、その他の友達などの喫煙では、親友15.7%、喫煙する友達が一人以上いる者27.9%、特に仲の良い異性4.3%であった。同世代の喫煙の割合に対して「半分くらい(50%くらい)」を含む、それ以上の者が喫煙しているの見積もった者の割合では、全体で12.3%(男14.1%、女8.4%)であった。これらの結果と、月喫煙との関連についてクロス表によるカイ2乗検定を行ったところ、例えば、この一か月に喫煙に誘われた経験がある者の月喫煙は66.7%であったが、誘われた経験のない者の月喫煙は6.4%と有意な差が認められるなど、ほとんど全ての項目において有意差が認められた。ただし、父親の喫煙においては、喫煙する父親を持つ者の月喫煙が45.2%、持たない者の月喫煙が41.0%と有意な差は認められなかった。

飲酒や喫煙に誘われた際の断る戦略については、「単純にいらぬ、いやと言う」、「断るための何らかの理由を説明する」、「その場を立ち去る」などの10の戦略を示し、それぞれについて「そうする、たぶんそうする、

そうしない、わからない」の4つの選択肢から回答を求めた。

まず、中学生が飲酒に誘われた際の断る戦略では、「そうする」と答えた者の割合が多かった戦略は「単純にいらぬ、いやと言う(73.9%)」、「理由を説明する(45.7%)」、「無言で手や首を振って意思を示す(29.2%)」であった。割合が少なかった戦略は「相手のすすめを受け入れて、お酒を飲む(5.4%)」、「誰かに助けを求める(8.6%)」、「相手を責める/相手に圧力をかけ返す(9.4%)」であった。

次に、高校生が飲酒に誘われた際の断る戦略では、「そうする」と答えた者の割合が多かった戦略は「単純にいらぬ、いやと言う(53.4%)」、「理由を説明する(30.8%)」、「今日はいいよ」や、「ふ〜ん」などの賛成でも反対でもない言葉を使って、その場をやり過ごす(17.3%)」であった。割合が少なかった戦略は「誰かに助けを求める(4.0%)」、「相手のすすめを受け入れて、お酒を飲む(4.2%)」、「相手を責める(4.3%)」であった。

そして、高校生が喫煙に誘われた際の断る戦略では、「そうする」と答えた者の割合が多かった戦略は「単純にいらぬ、いやと言う(60.6%)」、「理由を説明する(35.3%)」、「無言で手や首を振って意思を示す(21.4%)」であった。割合が少なかった戦略は「相手のすすめを受け入れて、タバコを吸う(2.6%)」、「誰かに助けを求める(5.7%)」、「相手を責める(6.5%)」であった。

これらの戦略と、月飲酒/喫煙との関連についてクロス表によるカイ2乗検定を行ったところ、中学生の飲酒においては、「単純にいらぬ、いやと言う」という戦略をとる者の割合は、月飲酒者では41.2%、そうではなかった者では61.8%と、後者で有意に多くなっていた。同様の傾向がみられた戦略は「理由を説明する(20.4%、36.2%)」、「無言で手や首を振って意思を示す(5.9%、13.6%)」であった。逆に、月飲酒の者の方が有意に多くなっていた戦略は「相手のすすめを受け入れる(7.2%、2.3%)」、「私のことはいいから、どうぞ飲んで」と相手が飲むようにすすめる(19.6%、10.0%)」であった。

同じように、高校生の飲酒における断る戦略と月飲酒の関係においては、「単純にいらぬ、いやと言う」という戦略をとる者の割合は、月飲酒者では45.6%、そうではなかった者では54.6%と、後者で有意に多くなっていた。同様の傾向がみられた戦略は「理由を説明する(22.7%、32.0%)」、「無言で手や首を振って意思を示す(11.7%、16.5%)」、「その場を立ち去る(4.6%、8.9%)」であった。逆に、月飲酒の者の方が有意に多くなっていた戦略は「相手のすすめを受け入れる(7.7%、3.7%)」であった。

高校生の喫煙における断る戦略と月喫煙の関係においては、「単純にいらぬ、いやと言う」という戦略をとる者の割合は、月喫

煙者では43.0%、そうではなかった者では75.0%と、後者で有意に多くなっていた。同様の傾向がみられた戦略は「理由を説明する(23.1%、46.6%)」であった。逆に、月喫煙の者の方が有意に多くなっていた戦略は「相手のすすめを受け入れる(18.5%、4.8%)」であった。

以上、誰かからのすすめに適切に対処できるための力量形成は従来通り、今後も重要なものといえる。また、同世代の飲酒や喫煙の程度を実際よりも多く見積もる者が飲酒や喫煙を行っていることも明らかとなった。そして、断る戦略においては、効果的と思われる断る戦略が中・高、飲酒・喫煙ともにみられたが、その一方で望ましいとは思えない戦略、例えば「その場をやり過ごす」、「相手のすすめを受け入れる」、「相手にすすめる」といった戦略を選ぶ者も少なくなかった。

(3) 実験授業による検討

研究の趣旨を理解し、協力の得られた学校教員を対象に、断るスキルの育成を含む社会的要因に焦点を当てたプログラムの開発に関わる検討会を開催した。協議においては、米国の教育プログラムの特徴の一つの、保護者を巻き込んだ活動等についての導入可能性について検討を行った。が、参加者の意見では、わが国の学校教育においては直接保護者に働きかけるようなアプローチについては困難であろうというものが多かった。保護者に対する働きかけの例としては、わが国の学校でも学級だよりや保健だよりや、学校保健委員会の活用などの可能性が考えられるため、今後の課題として残されたといえる。一方、児童生徒を対象とした教育プログラムとして「規範の誤認」などを学習させることについては子供の実態と一致するところがあるという理由から、おおむね支持する参加者の意見が多かった。例えば、普段の子供の様子から「皆も だから、僕も したい」といった声を聞くことが多いという意見や、地元の祭りの時期を中心に、周りの大人や目上の者が大量の飲酒をしている様子を目にする者が多く、中には直接飲酒を勧められた経験のある者も少なくないとのことであった。そのため、このような生活環境であっても周りに惑わされることなく、飲酒や喫煙の誘いに適切に対処できることを目指した指導が必要であろう、ということについて確認することができた。

対象学年は、小学校第6学年「病気の予防」、中学校第3学年「健康な生活と疾病の予防」の喫煙や飲酒に関わる指導と関連付け、特別活動や道徳の時間を活かして、小6または中1、及び中3または高1を対象とした。また、指導方法の工夫は、ワークシートを用いたグループワークによって参加型学習となるように配慮した。実験授業に参加した学校は、小学校2校(共に6年1クラスずつ)、中学校1校(1年3クラス)、そして高校1校(保

健委員会委員の1,2年生)で、それぞれの授業の様子はビデオ撮影を行った。また、小学校1校を除いた学校において、実験授業の前後で質問紙票による評価も行った。

全ての実験授業終了後に、実験授業の実践者、及び同授業を参観(または記録VTRを視聴)した教員を交えて事後検討会を開催した。まず、事前事後評価が実施できた学校における結果では、飲酒、喫煙を勧められた場合の断る自信などの指標がわずかに改善の傾向を示すとともに、授業が分かりやすかった、などの回答した者の割合も高かった。しかし、対照群を設定することができなかつたために、児童生徒が期待回答に偏っている可能性も考えられる。そこで、実験授業での児童生徒の反応や授業実施者の反省などを手掛かりとしながら、教育プログラムの有効性と今後の課題について協議した。主な意見は、次のとおりである。

まず、授業の導入で身の回りの決まりやルールを振り返らせて、(就寝時刻やゲームの使用時間などの)わが家の「普通」が家庭や人によって異なること、それらを遵守することの意味について考える場面を設定した。その結果、取り上げるルールにおける「友達の行動の実態」によっては、望ましくない傾向が増長されることもあり、例えば「みんなも遅くまで起きているから、自分も遅くまで起きていても大丈夫だ」といった望ましくない反応が引き出されることもあった。

授業の展開部分においては、「回りの人の行動が、自分の行動選択に影響していること」について考えるためにワークシートを用いた活動を行った。ここでの活動における問題では、「皆がどうしているかということと、自分の行動がどう関係するのか、わからない」などの戸惑いを示した子供が多く、特にその傾向は小学6年生で顕著であった。これはおそらく発達段階や個人差によるものと思われるが「回りのみんながどう(行動)していようが、自分の行動選択には無関係だ」と考える子供にとっては、本授業の学習課題が受け止め難かつたのではないかと考える。そのため、このような内容については中学校以降が受け入れやすいものと思われた。

そして、展開の後半で喫煙や飲酒に誘われる場面を想定し、そこまでに学習した内容をいかして「喫煙や飲酒を誘われた時に、『みんなもしているから(あなたも)一緒にしよう』と誘われたとしても、しっかりと断ることができるようにすること」を目指してケーススタディに取り組んだ。この活動においては、喫煙と飲酒によって子供の反応が異なり、喫煙では、ほとんどの者が肯定的な態度や規範意識を示すとともに、毅然と断ろうとする姿がみられた。それに対して、飲酒に関しては、むしろそこまでの授業の内容を受けて回りの子供に「飲んだことあるよね?」と隣同士で探りを入れたり、「これは、断れないだろ」とつぶやくなど正直な反応が多くなり、

自分なりに上手く断る手立てを見つけられない様子の子供が散見された。これは、一見すると今回の授業を受けることで、期待されることとは真逆の反応を子供から引き出してしまったようにも思われた。しかしながら、ケーススタディを通して、そこでの人間関係をより現実的に受け止めて真剣に悩み、葛藤しながらも何とか断るための手立てを考えようとする姿は、より深い思考に至っていると考えられる。とはいえ、このような指導は「もろ刃の剣」のような難しさがあり、教師の注意深い支援の必要性を痛感した。

以上、実験授業を踏まえて、およそ次にあげるような課題が残された。家庭生活などでのルールや決まり、約束事を取り上げる場合には、子供の実態に対応した事例を選定すること。周囲の人の行動の影響に対する指導においては、学年が若いほどより丁寧な指導を計画する必要があること。喫煙に比べて飲酒の場合においては、実際に誘われた経験などを持つ子供もあり、毅然と断ることができないものも見受けられるため、教師が授業のねらいや目指すべき子供の姿を明確に意識しつつ注意深く支援していくことが重要であること、などがあった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計4件)

岩田英樹、野津有司、片岡千恵、工藤晶子、久保元芳、中山直子、渡部基: 飲酒行動において中・高校生が間接的に受ける社会的圧力(passive social pressure)の影響, 第60回 日本学校保健学会, 2013年11月16, 17日, 名古屋大学(名古屋市)

岩田英樹: 喫煙飲酒防止教育におけるNormative Educationの実態 米国健康教育教材の分析から, 北陸学校保健学会, 2012年10月27日, 金沢大学(金沢市)

渡辺希実, 岩田英樹: 青少年の喫煙開始・継続要因の一考察 ~インタビュー調査から~, 第68回 北陸学校保健学会, 2011年11月20日, 金沢大学(金沢市)

岩田英樹, 野津有司, 渡部基, 佐藤幸, 他5名: 保健学習におけるロールプレイングによる指導の課題 - 道徳の時間における指導の特徴との比較から -, 第58回 日本学校保健学会, 2011年11月12, 13日, 名古屋大学(名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 英樹 (IWATA HIDEKI)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号: 60322111